

## りびんぐらいぶず 令和元(2019)年8月第1号

# 南無阿弥陀佛をとなふれば

### ご讃題

南無阿弥陀仏をとなふれば  
百重千重圍繞して

十方無量の諸仏は  
よろこびまもりたまふなり

(Ref 『現世利益和讃』第百十首、注釈版聖典 p576)。

### はじめに

七月二十八日(日)滋賀教区第一ブロック研修会が滋賀組で開催された。

第一部は、寺澤真琴師による「親鸞聖人(浄土和讃)と人間理解」と題する御講話であった。ご講師は、先の大遠忌法要記念事業の一環として大峯顕(あきら)師が毎月六角会館で講じていらっしやった浄土和讃のテープ起しの事業に携われた。

その関係から現世利益和讃の最後に位置するご讃題のご和讃についてお話戴いた。

ご和讃は浄土和讃を冠頭讃(かんとうさん)から数えて第百十首目に当たる。

南無阿弥陀佛を称えれば、称える衆生を十方無量の諸仏方が百重千重に取り囲んでお慶び下さりお護り下さるとというのがその大意である。そのお心は、信巻後段の現生十首の益(やく)の第四、諸仏護念(しょぶつごねん)の益である(Ref 註釈版聖典 p251)。

### 称名は念仏交響楽という象徴的な宇宙観

これを大峯師は、十方無量の諸仏方によるいわば「念仏宇宙交響楽」であり、衆生もその中に含まれて居ると表現なさった。

このような「念仏宇宙交響楽」という捉え方は、曾て、瓜生津隆真先生からゼミの中で直接承ったことがある。

顧みれば、既に京都学派の哲学者のお一人武内義範先生(直弟子系の高田派専修寺の末寺)が同じ趣旨のことをおっしゃっていたことを思い起こす。(Ref 石田慶和『これからの浄土真宗』p123~124)。

『阿弥陀経』の「六方段」に示されているように十方無量の仏様方が各々の世界でお名号の功德をほめ讃え実践的にお名号を称えていて下さる。そのことを卑近な私たちの体験で譬えると、それは丁度コーラスのようなものになるというのである。(Ref 石田慶和『これからの浄土真宗』p124~126)。

たとえ私一人の念仏の声は貧しくとも満堂の念仏の声に融合するときには、何とも言えない荘厳な響きとなる。そこでは聞いていることと歌って居ることが一つになる。

## 大行の大行たる意義

本願寺派では、三業惑乱の後、第十七願も所行説を正義とする見方が通説となった。ここでは、第十七願を「名号成就の願」と捉え、法体名号の一人働きこそが正しいとされてきた。その意図は、衆生による信心獲得前の念仏を自力の行であるとして排除せんが為であった。

しかし、親鸞聖人ご自身は、第十七願を「名号成就の願」とは仰せにはならず、「諸仏称揚の願」「諸仏称名の願」「諸仏咨嗟の願」(Ref「行巻」『浄土文類聚鈔』「註釈版聖典 p141、478)等々と仰せ下さったのであり、「大行とは即ち無碍光如来の名を称するなり」(大行積、註釈版 p141)とお示し下さったのだった。

名号大行論という法体名号の一人働きの大行論理ではなく、法体積(六字積)と約機積(銘文)が構造的に働く方便法身の大行論理だったのである(私解)。

果たせるかな、武内先生は、一切の諸仏が自分が称えることによって、一切の衆生にも自分と同じように名号を称えしめる、それこそが諸仏称名の願の、或いは諸仏咨嗟の願の基礎であると明示して下さる(Ref 石田慶和『これからの浄土真宗』p124)。

諸仏咨嗟というのは、諸仏が阿弥陀仏の威神功德をほめたたえることであるが、そのことは先ず第一に諸仏が阿弥陀仏の御名を称することであり、その諸仏の称名咨嗟というものの中に一切衆生の称名念仏が含まれ、催起させられる。

その意味で、われわれ衆生の行としての称名念仏が諸仏称名の中に含まれているのであるとまで仰せ下さっていたのだった(Ref 石田慶和「これからの浄土真宗」p124)。

こうした理解を踏まえてご讃題の構造を見直してみよう。

諸仏がなぜお慶びになったかと言えば、諸仏自らが讃嘆したように、諸仏自らが称名したように、これに習って、終に衆生が「南無阿弥陀佛と称えたから」であったと窺われる。(備考)やってみせ 言って聞かせて させてみて(山本五十六)の詞が思い起こされる。

本願成就文の構造は「諸仏如来が無量寿仏の威神功德を讃嘆なさる、その讃嘆の名号を聞くことによって衆生は信心歓喜したのである。」微かでもあっても一度信心歓喜すれば衆生の胸のうちには自らも亦これに習って念仏してみたいと思う心が湧き上がって下さる(乃至十念 = Anusmareyus)、すると自らも亦精神を最高度に高調させた称えつつ聞き、聞きつつ称える執持名号の三昧境に招き入れられ (manasikāra)、聞其名号信心歓喜のプロセスに引き入れられるのであった。

## 大峯先生のご功績に考える

ご講師は、大峯先生のご功績を挙げるとすればそれは二つになるとおっしゃった。

「南無阿弥陀佛は、言葉になった仏様だ」というのが一つ、今一つが、「お聖教は教え

の冷凍食品であり、解凍して食べて味わってみななければ分からない」というのである。

但し、これらはそれをそのまま鵜呑みにするのではなく、ロジックの原点を確かめ直して頂戴するのがよいと窺われる。

「言葉になった」というのは、キリスト教神学に影響を受けた嫌いがある。

「言葉だ」という丈では、尚、冷凍食品を脱却してはいない懸念が残るからである。

「言葉」の儘ではなく、「声に出して南無と聞こえるときには」という構造を伴ったものでなくてはならなかった筈である。

これは先に善導大師の六字釈の「言南無者」の「言」についての藤場師のお領解で味わわせて戴いた通りである(Ref「弊誌」令和元年六月第二号「南無」といふは帰命なり)。

瓜生津和上は、「南無阿弥陀佛」は、人間のこしらえた言葉ではないと仰せ下さった。お浄土から届けられた如来様の仰せであるという意味が秘められていたのだった。

如来様の御言葉は、方便法身の働きによって構造的に如来様の仰せである(法体釈)と頂戴すると同時に承る衆生の立場からの頂戴しぶり(約機釈)によって初めて聞名が叶うご縁が開かれるからであった。合掌。

(後書き)咨嗟称我名の「咨嗟」は、「ああ」という感嘆詞に始まる(漢和辞典)。「稱我名」は、もとより称名念仏である。しかれば「咨嗟称我名」全体が感嘆詞に始まる讃仰の称名念仏行だったと頂戴することができる。合掌。

仏壮お聴聞の会(ご法話会)

八月四日(日)二十時より

正覚寺歓喜会(かんぎえ、盂蘭盆会(うらぼんえ)) 八月二十五日(日)十時より

仏教婦人会例会は、歓喜会に合同して営みます。

滋賀組親鸞聖人讃仰特別布教(会所)龍光寺 八月二十四日(土)九時二十分より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥